資料１３

令和３年度　富山市通学区域審議会
第２回審議会における審議とりまとめ（案）

Ⅰ　富山中央地域

―ポイント―
■富山中央－３（１）（２）は、長期的に適正規模を維持し、教室数に余裕があり、通学距離が３㎞を超える児童はいないことが見込まれ、中学校進学時の児童の心の負担が小さい。合理的に考えれば最もよいが、柳町小学校区が２つに分かれるため、地域の理解を得る必要がある。
■富山中央－１は柳町小学校区が２つに分かれない案であり、地域へ示す際の選択肢となり得るが、通学距離が３㎞を超える児童への対応が必要である。

１　進学先中学校について

○富山中央－１では進学先中学校が４つとなり、富山中央－２では一部の児童だけが東部中学校へ進学することとなる。学校選択制があるのでそこまでこだわらなくてもよいかもしれないが、寂しさなど児童の心の負担という点で不安を感じる。〔学校関係者〕

○富山中央－３（１）（２）では、友達と同じ中学校へ進学できる。また、例えば５年生から６年生になるときに統合があったとすれば、１年早く進学先中学校の友達と一緒に過ごして学習できる環境となり、安心感にもつながるのではないか。〔学校関係者〕

○全員が同じ中学校に進学することによって、中学校への所属感のようなものを感じられるように意識が変わっていくと思う。〔学校関係者〕

２　通学距離・通学路について

○富山中央－１、富山中央－２について、今後も恒常的に１～２％程度の規模で、通学距離が３㎞を超える児童が入学してくると考えてよいだろう。
〔学識経験者〕

○富山中央−３（１）（２）では、通学距離が３㎞を超える児童はおらず、徒歩で通学することができる。〔学校関係者〕

○富山中央−３（１）において、柳町小学校区の児童が奥田小学校に通う場合、線路を挟んで通学することになるが、その通学路は小学校１年生の児童が歩くことを踏まえても特に支障のないよう配慮する必要がある。〔学識経験者〕

３　教室数について

○少人数指導等を行ったり、特別支援学級が増えている現状があったり、クラスの定数が変わったりすることを想定すると、教室数に余裕があったほうがよい。〔学校関係者〕

４　地域の理解について

○富山中央−３（１）（２）では、柳町小学校区が２つの校区に分かれることについて地域の理解を得る必要がある。〔学校関係者〕

５　地域、保護者への案の提示の仕方

○審議会では合理的に考えると富山中央−３（１）（２）がよいという意見が多かったと示した上で、教室数も余裕があり、通学距離が３㎞を超える児童に配慮するとして、富山中央−１を富山中央−３（１）（２）に準ずる案として複数案で提案した方が、地域の方の考えの幅が広がって理解が深まり、納得していただけるのではないか。〔学識経験者〕

○中学校のブロックごとに自治振興会のつながりがあると思うので、中央小学校と統合する富山中央−１を示すと、現在つながりのない自治振興会と統合するということで、奥田小学校や東部小学校とは統合にならないのかと聞かれると思う。奥田小学校と統合することが難しい理由として、奥田小学校と統合した場合は大規模になることを、富山中央−２で示した方がよいのではないか。〔ＰＴＡ代表者〕

Ⅱ　富山西部地域

―ポイント―

■通学距離が３kmを超える児童が過半数となるため、スクールバスの運行やそのルートについて工夫する等、丁寧に対応することを念頭に、妥当な案である。

１　通学距離について

○過半数の児童の通学距離が３kmを超えるのは、鵜坂地区とつながる居住誘導区域に多くの児童が住んでいること、また、五福小学校が移転したことによるのではないか。しかし、地域生活圏が異なり、大規模校になることから、鵜坂小学校と統合するのは難しい。〔ＰＴＡ代表者〕

○羽根地区から神明小学校に向かうルートに大多数の児童が居住していると思うので、その道を通るスクールバスの運用により、通学距離の問題は解決できるのではないか。〔ＰＴＡ代表者〕

○スクールバスを運行するとしても、ルートの選定、集合場所など、しっかりしたものを示さないと、地域の理解を得るのは難しい。〔学識経験者〕

○現在の五福小学校に通う児童の中にも通学距離が３kmを超える児童がいることから、スクールバス等で対応する場合、どの児童をスクールバス通学の対象とするか考慮する必要がある。〔学識経験者〕

○羽根地区から鵜坂小学校まで（約１．７km）、有沢地区から光陽小学校まで（約１．７km）は徒歩圏内で、歩けば体力向上につながる。安全な通学路が確保できるのであれば、特殊事情として、羽根地区、有沢地区に居住する児童に通学する学校を選択できる余地があるといい。〔学校関係者〕

Ⅲ　富山東部地域

—ポイント—

■長期的に適正規模になり、教室数も充足しているが、通学距離が３㎞を超える児童へは丁寧に対応する必要がある。

■太田小学校の再編を議論しているのは、一時的に全学年単学級でなくなる可能性はあるものの、長期的には全学年単学級となると見込まれるからであり、このことについて丁寧な説明が必要である。

１　通学距離について

○通学距離が３㎞を超える児童が半数近くおり、丁寧な対応が求められる。

〔学識経験者〕

○富山西部地域にも共通するが、小学生の間はスクールバスで通学し、中学生になると自転車通学に切り替わることが想定される。既にスクールバス等を利用している地域も参考に、児童生徒の負担が大きくならないよう柔軟に対応されたい。〔学識経験者〕

２　今後の学級数の変動について

○太田小学校の児童数の変動を見ると、令和７年度は２０１人、令和１２年度は２０５人となっており、２００人という学校規模では全学年単学級とならない可能性もあるが、令和１７年度以降は全学年単学級になると思われる。

〔学校関係者〕

Ⅳ　その他

１　地域への理解について

―ポイント―

■地域との連携や意見を聞くことは、再編計画策定後に議論を進める上で大切なことである。一方で、本審議会は、子どもたちの教育環境を将来的にも担保するという立場で審議を行い、地域の方との議論を進める上で必要な材料を提供することが肝心である。

○地域の思いは数字だけでは算定できず、データだけでは判断も難しい。地域の中での生き方、将来の担い手の育成という観点からも、義務教育段階は大切な時期である。〔学識経験者〕

○地域、学校には歴史や文化があり、住んでいる方しか分からない悩みもある。審議会の場において、一般論として発言するのはよいが、地域のことを軽々しく判断するのはよいことではない。〔学識経験者〕

○年代によって違った考え方があるので、地域の方々の意見をなるべく聞くことは大事である。〔学識経験者〕